

論文

教師の戦争責任を問うた教師たち

—「戦争教育の記録運動」、その始まりと展開—

松 元 賢次郎

キーワード

教育の戦争責任 生活記録運動 サークル運動 勤務評定闘争 日本教職員組合

はじめに

一九七〇年代、戦時期を教え子として過ごした者たちが、戦時期に行われた教育を批判した。それは教師の戦争責任を問うものであった。^①ここでの教師の戦争責任とは、戦争に協力するために、教え子を軍隊や満蒙開拓青少年義勇軍に志願させ、一部の教え子を死に追いやったことや、教え子たちの戦時期や戦後の思想に影響を与えたことである。

この点に関して、長浜功氏は戦時期を教師として過ごした者の大部分が、教師としての自身の戦争責任を明らかにしてこなかったと指摘している。^②

だが、一九五〇年代後半に、「戦争教育の記録運動」という運動が始まり、教師の戦争責任が追及された。本運動は、戦争に協力するための教育を、その教育を行った教師自身が、批判的に記録した戦後の取り組みである。長浜氏の指摘は、本運動を踏まえた上での評価ではない。なお、

本運動の書き手には、戦時期に教え子だった者も含まれる。

「戦争教育の記録運動」は、一九五七年に山形県教員組合定期大会で提案され、直後に山形県教員組合の代表が日教組定期大会でも提案した。そして一九五八年一月、山形県教員組合によって記録集、『山形の教育—学校白書と戦争教育の記録—』（以下、『山形の教育』が発刊された。史料を確認した限りでは、山形県のほか、山梨県（一九五九年二月）、福井県（一九五九年四月）、埼玉県（一九五九年八月）、静岡県（一九五九年八月）、広島県（一九五九年八月）、岡山県（一九五九年一月）で記録集が作られた。また、山形県教員組合最上地区支部青年部（一九六一年一月）でも記録集が作られた。

教師が空襲や銃後の苦しみを記録する教師の戦争体験記は、一九六一年の後も見られる。しかし、戦争に協力する教育の様子を、その教育を行った教師自身が批判的に記録した「戦争教育の記録」は、『山形の教育』を含めたいくつかの記録集以外には見られない^④。従って、このような記録が、戦後日本社会からどのように生じていくかを明らかにすることが重要だと考える。

「戦争教育の記録運動」は山形県の青年教師によって構想された。山形県は生活記録運動が盛んな県として知られ、近年、北河賢三氏らによって研究が進んでいる。ここで生

活記録運動について説明しておこう。北河氏によれば、生活記録運動は「困難や障碍をかかえる人びとが、自らの生活と生き方、家族のくらし、地域・職場のあり方を考え、エンピツを執ってその現実を具体的に記録した運動」であり、生活記録を書き話し合うことによって、「直面する生活上の諸課題についての認識を深め状況を打開する契機となる」運動であった。また、生活上の諸課題を考える中で「自己および家族の生活史の記録が戦争体験の記録と重なる面があるのは当然であり」、生活記録運動の中から戦争体験記が生まれたことを指摘している。北河氏は山形県の生活記録運動が勤務評定闘争と相互に影響しあった点も指摘している^⑤。

これらの点を踏まえ「戦争教育の記録運動」について概観しておこう。生活記録を行いながら地域の問題に向き合っていた教師たちが生活記録の方法を模索し省察する中で、勤務評定など教育行政の保守化に危機感を持ち、構想した運動が「戦争教育の記録運動」であった。つまり、「戦争教育の記録運動」は、山形県の勤務評定闘争の中で生活記録運動から発展した運動なのである。

本稿で取り扱う内容は、山形県の地域の運動から「戦争教育の記録」が構想され、『山形の教育』が発刊されるまでの経緯である。その際、鈴木輝男^⑥の取り組みに焦点を当

てる。鈴木は山形県教員組合南置賜郡支部（後に米沢地区支部）に所属した青年教師である。鈴木に焦点を当てるのは、鈴木が「戦争教育の記録運動」を進めた一人であったからである。また、彼の生活記録の運動論や生活記録を行う中での疑問、彼が行った教師の態度を問う運動から、「戦争教育の記録運動」が構想され展開していくからである。

一、鈴木輝男の来歴と生活記録運動

まず、鈴木が生活記録を始めるまでの経緯を見ていこう。鈴木は一九三二年、山形県南置賜郡上長井村古志田の農家に生まれ、興讓館中学校在学中に敗戦を迎えた。（旧制）中学校を卒業した後、山形大学教育学部に進学し、一九五二年に卒業。四月より南原村立関中学校（以下、関中学）に赴任した。なお、「戦争教育の記録を進める鈴木は、自身の受けた戦中教育について、強烈に印象に残っているものはないと言う」。

この後、一九五四年に南原村立関中学校綱木分校（以下、綱木分校）へ、一九五五年に米沢市立三沢東部中学校（以下、三東中）へ、一九五九年に米沢市立山上中学校へ異動し、一九六〇年に退職した後、山形県教員組合（以下、県教組）米沢地区支部書記長（専従）となった。なお、関中

学、綱木分校、三東中のあった地域は、炭焼きを生業としていた。

鈴木は、教師になって参加した県教組南置賜郡支部の集会で、同じく青年教師であった坂本源男（一九二九～一九七五年）と出会った。以後、二人は村の貧困について話し合う仲となり、後に「戦争教育の記録」を進めることになる。

鈴木の生活記録は村の貧困に苦しむ教え子を救うことを目的としていた。鈴木がこのような生活記録を始めるきっかけは、生徒の嘆きを聞いたことにあった。関中学の地域で、炭俵を背負い運搬するのは女性の仕事であった。そのため、女性たちの肩には筋肉がつき、背中が四角くなっていた。それは鈴木の指導する女子生徒も例外ではなく、彼女たちは炭焼きの運搬による身体の変形を鈴木に訴えた。この嘆きを作文に書かせたことが、鈴木の生活記録の原点であった。この後、鈴木は勤務する各学校で生徒や青年たちと学級文集を作成し、生活記録を行っていく。鈴木が後に振り返ったところによれば、女子生徒の嘆きを作文として書かせようと考えたのは、『山びこ学校』の影響を受けてのことのようである。

鈴木は関中学に勤務を始めた頃、他の教師からの紹介で須藤克三や真壁仁と出会い、山形県児童文化研究会（以下、

県児文研^⑮）に参加し、おきたま児童文化研究会^⑰では発足当初からの会員となった。こうして鈴木は、須藤や真壁など山形県内の文化人から、生活記録について学んでいった。同時に、サークルを通して、様々な教師と生活記録について考え合っていた。

鈴木的生活記録の中での運動論の変化を見ていこう。当初、鈴木やその生徒たちは、村の大人を「古い」存在ととらえ、批判していた。だが、次第にこの考え方は変化し、村の大人は協力すべき対象となる。そして、大人とともに村の貧困を解決することを目指していく。

鈴木は最初に勤務した関中学で、一九五三年に起きた凶作への対策を特集した学級文集を作った。ここでは親を批判する生徒の記録が散見される。批判を行う理由は、親が怠惰で、農業する上で学問はいらないと考え、さらに豊作で金が貯まれば計画性もなく浪費し、その結果、凶作になれば苦しんでいるからであった。生徒は、こうした親の「古さ」が原因で、農民の生活が苦しいと考えていた。鈴木も生徒と同じ考えであり、凶作の原因として、大人たちが「古い」方法でいつまでも農業を行っている点や、学問はいらないと考えている点を挙げる^⑱。また鈴木は、怠惰な大人の様子を指摘した後「お前たちまで／そんな人間にさせたくない^⑲」と述べている。

このような鈴木の大人に対する批判的なまなざしが変化していく。それは、鈴木が綱木分校に勤務する頃であった。一九五四年四月、鈴木は綱木分校に転勤する。一九五五年三月に綱木分校を去ってから、鈴木は綱木青年学級での生活記録を文章にまとめている。この中で、綱木分校に勤務し始めた頃の考えを述べている。当初、青年学級に通う青年たちとって、村の大人は「おくれた民」であり、批判の対象であった。だが、生活記録を進めることを通して「生活に対する怒りとなげき」を親たちといつしよに考えるような必要があることの認識に発展していった^⑳、と述べている。また他で鈴木は、生活記録を「大人の人たちは声援してくれるとオレは思う^㉑」とも表現している。このように、村の大人は共に学ばねばならない存在であり、生活記録を支持してくれる存在として、認識されるようになっていった。鈴木は、綱木分校の頃の大人たちを生活記録の「支持者」と表現している^㉒。

こうした認識の変化の背景には、大人や青年に対する認識が変化したこと、生活記録を行う上で周囲からの批判を回避せねばならないこと、村や大人の「古さ」を批判する生活記録の限界に気が付いたことがある（詳細は二節で説明）。生活記録を進める中で、鈴木たちは大人が「古い」原因に土地の所有関係があると認識した^㉓。綱木は炭焼きを

生業としていた。そして、その炭は山の木を利用して作られていた。従って綱木では山林地主に富が集まり、土地を持つていない者が生活を改善するべくいくら努力しようとも、限界があった。このような土地の所有関係の結果、土地を持つていない大人たちは貧しさから脱却することをあきらめ、「古く」、怠惰になってしまっていると、鈴木たちは考えた。この問題を解決するために、一部の青年が土地（山林）の共有化を訴えた。すると青年は、大人たちから「左翼」や「アカ」という批判を受けた。このような批判を避けるためには、山林の共有化などを主張する前に、青年たちの活動に理解を示してくれる「支持者」を増やしておく必要があると、鈴木は考えた。鈴木が想定していた「支持者」とするべき対象には青年だけではなく、大人も含まれていた。それは、青年と大人の共通点に気が付き、さらに土地の所有関係を変えることの難しさに気が付いたからであつた。

生活記録を行う青年たちを批判する者の中には、大人以外に青年もいた。例えば、生活記録を行う青年に石を投げつける青年もいた。このように、鈴木は、青年たち自身の中にも「古さ」を見出していった。

他方で、鈴木は、かつて大人たちが青年だったころ、大人たちも同じように「古さ」に悩んだこと、それにも関わ

らず「古さ」が変わらなかつたことを知つた。青年自身も大人と同様に「古い」という認識、また大人も青年と同様に「古さ」に悩んだという認識により、青年たちは大人たちとの違いよりも、共通点に注目するようになった。さらに、かつて大人たちも「古さ」に悩んだにも関わらず、「古さ」を変えられなかつたほどに、土地の所有関係を変えることが難しいことにも気が付いた。

このように変えることが難しい土地の所有関係を改めるためには、鈴木たちの主張への批判を極力減らす必要がある。そのために鈴木は、大人と青年との共通点に注目し、青年だけでなく大人も生活記録の「支持者」に変えることが必要だと考えるようになった。

大人たちを生活記録の「支持者」とした鈴木は、三東中の頃には彼らを生活記録の参加者とするようになった。例えば学級文集の中で親に対し「子供のノートをみて下さい。出来たら意見もかいて下さい。／その次にできたら走り書きの手紙を ボクに下さい。「中略」それをもとにして話し合ってみましょう」と呼びかけていた。鈴木が担当した学級は一人一冊、生活記録集を作っているようである。ノートとはその生活記録集のことである。ここからは子どもと教師だけではなく、親と教師とが生活記録を行おうという意図が読み取れる。生活記録を通して、親に村の生活

を見直させ、「古い」考えを改めさせる。そうしない限り、「古さ」の根本的な原因である土地の所有関係は変えられな
と考えたのであろう。

ただし村の大人が生活記録に参加することは難しかった。地域の権力者である山林地主から土地を借り炭焼きを行う彼らにとって、山林地主に睨まれば炭焼きすら行えなくなる³⁵。生活記録にはその危険性があつた。

詳細は不明であるが、鈴木は山林地主と対立するのではなく、山林地主をも「支持者」に変えようと働きかける。そして、山林地主から学級文集を配ってもらい、山林地主公認の学級文集とすることで、村の大人も生活記録に参加しやすくなったという。鈴木はこの手法を「ボス工作」と呼んでいる。鈴木は土地の所有関係を変えるような「反体制」の取り組みを行うからこそ、権力者が「やってみよう」と言わねばできないと振り返っている³⁶。

なお、鈴木が三東中に移った一九五五年四月一日、旧南置賜郡は旧米沢市と合併し、米沢市となった。鈴木・坂本の勤めていた三沢は米沢市となり、鈴木や坂本の所属していた県教組南置賜地区支部も、米沢地区支部に合併した³⁷。鈴木は既に南置賜郡支部の青年部部长となっており、合併により米沢地区支部の青年部部长となった³⁸。

旧米沢市の教師は、旧南置賜郡と異なり「観念」「理屈」

が先行し³⁹、エリート意識が強く、また校長や教育長などの権威に従いやすいと鈴木は認識していた⁴⁰。

この旧米沢市の青年教師と、旧南置賜郡の青年教師がともに活動するに当たり米沢市の教師の間では軋轢が生じていたようだ。青年部長であった鈴木は、一九五五年五月の米沢地区支部青年部総会を前にして、「職場討議のために」という文章を作成した。その中で鈴木は、青年部の現状を「教師と教師の縦横の分断」などと表現していた⁴¹。

旧米沢市の青年教師は、「親組合一本であれば能率的である⁴²」と考へ、青年部廃止論を主張し、青年部の存在価値そのものを問題視していた。こうした考へに対し鈴木は、「理論やスローガンをふりまわすのではなく、「一人一人の悩みや体験をみんなの問題と」することで、青年教師が集団化することを訴えた。そして、その集まりから親組合に働きかけることで、親組合の「下請工場」化している青年部の活動の質を高めることを呼びかけた⁴³。

鈴木は、旧米沢市の青年教師の態度を批判し、「一人一人の悩み」を「みんなの問題」にするという生活記録的な方法をとることを訴えていた。

鈴木は「職場討議のために」そのものが、旧米沢市の青年教師への呼びかけであり、彼らの態度を改めるべく本史料を作ったと振り返っている⁴⁴。

米沢地区支部青年部では、合併によって同じ地区支部となった旧南置賜地区支部の教師と、旧米沢市の教師の態度の間で軋轢が生じていた。青年部部长であった鈴木は旧米沢市の教師の態度を改めるべく、生活記録的手法をとろうとしていた。

二、戦中教育への問い・「戦争教育の記録」の提案

時代は前後するが、一九五四年度に県教組はサークル育成方針を掲げ、県内のサークル運動を支援した。この一環として、県教組文教部長であった劔持清一がおきたま児文研の第二〇回例会に訪れた。そして、その様子が、県教組の機関紙『山形教育新聞』に「サークル紹介」として掲載された。⁴³

この時、鈴木は初めて劔持と出会った。そして鈴木と坂本は、戦時中に劔持自身が満州で行っていた教育について、劔持から聞くのであった。⁴⁴ 劔持は一九一五年に生まれ、途中兵役を挟みながら山形県内で教師をし、一九四一年四月から奉天弥生在満国民学校の教師となった。劔持は自身の体験から、植民地での教育が「戦争をバックアップする教育」だったこと、そして教育が戦争や植民地政策を支えるということ、鈴木や坂本に語った。⁴⁵

この話を聞いてすぐに、鈴木が戦中教育について坂本と議論を始めた訳ではない。議論を始めたのは鈴木が三東中に勤める頃だ。そのきっかけは生活記録を進める中で、農村が復興期の日本経済に利用され、さらに教師がそれを支えていると認識したことであつた。⁴⁷

一九五四年前後から、鈴木や坂本の勤める南置賜郡では次三男や娘の人口流出が始まっていた。⁴⁸ そして、鈴木は生活記録が青年たちの流出を手助けしていることを理解した。⁴⁹

例えば、綱木には「働き手が多ければくらしが安泰になる」という「古い」考え方が存在していたため、次三男や娘は労働力として重視された。だが、炭焼きをする際「人数が増えるほど〔中略〕一俵についての純益が減っていく」ということが、生活記録を通して明らかになった。このことにより、次三男や娘が炭焼き労働から離れることに大人たちは納得し、彼らは都市へ就職していった。⁵⁰

鈴木は、都市に出た綱木時代の教え子の生活の様子を、三東中に勤める頃に聞いた。鈴木は、日本の高度成長の中小企業に就職した。そのため鈴木は、「日本の高度成長の一番下部構造の役割を」教え子たちが担わされていること⁵¹、教え子たちの都会での生活が「成功しなかった」こと⁵²を実感した。それでも村の青年たちは炭焼きでは豊かにな

れないと考え、都市に憧れを持ち、次々と都市へ就職していった。⁵³鈴木は村や大人の「古さ」を強調するだけの生活記録では、青年を都市に追い出すだけだと考えた。第一節で説明した背景に加えてこのような点からも、鈴木は村を出たくなるような「古さ」を変える必要があると考えられるようになった。そして、生活記録に大人を参加させ、土地の所有関係を変える必要性があると考えるようになった。⁵⁴

これに加えて、鈴木は坂本と戦中教育について議論を始めた。農村の貧困に由来する、都市への憧れと人口流出を前にし、鈴木と坂本は農村が復興期の日本経済に利用されてきたと考えるようになっていった。さらにそれを、自身の生活記録が支えてしまったことも認識していった。⁵⁵鈴木と坂本の中で、この認識が、剣持の述べた教育が戦争や植民地政策を支えたということ、特に農民が憧れを持って満蒙開拓青少年義勇軍に参加し、教師がそれを支えた点と重なった。⁵⁶

そして、坂本が「村が戦争を支えた」と述べ、村の中で教育がどのように戦争を支えたのが、鈴木と坂本の議題になっていった。その後、坂本の提案によってそれぞれの職場の教師に対し、戦時中の教育に関する聞き取りを始めるのであった。⁵⁷

この後、一九五六年の末、坂本が「戦争教育の記録」を、

米沢地区支部の青年教師数名による座談会で提案した。⁵⁸この時期に提案が行われる直接的な要因は、教育委員会の保守化にあった。一九五六年一〇月一日に実施された任命制教育委員会により、この年の末頃には、山形県教育長の塚原主計が態度を保守化させていた。⁵⁹『山形教育新聞』は愛媛県での勤務評定と、山形県教育長の保守化を関連させ、「対岸の火事とのんきにかまえてはいられない」と報じていた。⁶⁰またこの頃、県教組が「政治的中立の立場」を逸脱しているという理由で、組合員の脱退問題も生じていた。『山形教育新聞』は脱退問題を、任命制教委制度の影響と報じていた。⁶¹この時、鈴木と坂本は、権威に従いやすい旧米沢市の教師たちが、保守化した教育委員会に迎合するのはという懸念を持っていた。⁶²

このように任命制教育委員会実施による危機感から、一九五六年末に、坂本が「戦争教育の記録」を提案したのであった。それは、農村の貧困や「古さ」の問題が行き着く先に戦争があり、教師が権威に迎合しながらそれを支えたのであれば、教師が「戦争教育に協力しない〔中略〕思想を作り上げ」る必要があると考えたからであった。⁶³つまり、教師の戦争責任を批判的に記録することで、権威に迎合し再び戦争に協力する教育を行う事態を防ごうとしたのであった。

坂本は、まず米沢市のみで戦争に協力する教育について記録を集め記録集を発刊し、その後この動きを米沢から徐々に広めようという構想を提案した。これに対し鈴木は、はじめから県単位で記録を集め記録集を発刊することを主張する。それは、戦争に協力する教育を記録することには、大きな政治的圧力が加わると考えたからだ。鈴木は、圧力に耐えられるように、「戦争教育の記録」の支持者と、実際に記録を書く参加者を増やす必要があると考えた。そのため、鈴木は県単位で記録を集め記録集を発刊することを主張した。そして、鈴木は提案が受け入れられていく。⁶⁵⁾

ただし県単位で行う場合、親組合と青年部の関係も考慮に入れねばならなかった。「戦争教育の記録」は①鈴木と坂本を中心としたサークル、②米沢地区支部青年部、③県教組青年部、④県教組定期大会、の順に提案されていく。③の段階で、県教組の全地区支部青年部が「戦争教育の記録」に賛同するが、それがなければ④段階で「親組合からつぶされたと思う」と鈴木は振り返る。その理由を、当時の組合が校長主導の組合であったため、青年部の提案が気軽に通るような状況になかったのだという。「職場討議のために」に記されていた青年部が「下請工場」化している状況とは、このような組合内部での力関係を示しているのであろう。⁶⁶⁾

このような組合内部での力関係、「戦争教育の記録」に対する政治的圧力を乗り越えるために、鈴木は「ボス工作」をし、支持者、参加者を増やしていった。⁶⁸⁾ その過程について、鈴木の聞き取りからまとめると次のようになる。

「戦争教育の記録」の提案が米沢地区支部青年部に持ち込まれた時、旧米沢市の青年教師たちの動向が問題となる。旧米沢市の青年教師たちは校長の動向を気にしているため、校長の同意がなければ、同意をしないと鈴木は考えていた。⁶⁹⁾

そこで、鈴木は米沢市の校長会長のところへ行き、「戦争教育の記録」の趣旨を説明した。そして校長会長に協力してもらうことで、米沢市内の全校長の承認を得た。また鈴木は米沢市の教育長や地域の権力者のところへも行き協力を求め承認された。⁷⁰⁾

このように、校長会長、教育長、地域の権力者の承認を得ることで、旧米沢市の青年教師が同意しやすい環境を整えた。こうして、旧米沢市の青年教師を支持者に変え、米沢地区支部青年部で提案が承認された。その後、「戦争教育の記録」の提案が県教組の青年部に持ち込まれた際も、鈴木は県の校長会や他市の校長会をまわり、彼らから承認を得ていった。なお、このことに加え、当時の反動的な政治情勢が、他の地区支部青年部にも問題意識を共有させた。

教師の戦争責任を問うた教師たち（松元）

こうして鈴木と坂本は、県教組の青年部で全地区支部青年部の代表から提案の承認を得た。⁷¹

このように、権力者の協力を得て「反体制」的な活動を行うという、鈴木が生活記録を行った手法を用いて、「戦争教育の記録」は進められたのであった。

そして、一九五七年六月、鈴木が県教組第一六回定期大会で「戦争教育の記録」を提案し承認された。この定期大会では「戦争と教育の反省記録」を書く。職場で読み合い語り合おう。父母とも話し合おう。」ということが、方針として掲げられ、議案にも掲載された。⁷²そして、各地区支部青年部が記録を集めていった。この時、各地区支部で「戦争教育の記録」に協力した青年教師は、サークル運動を担っていた教師だった。⁷³

県教組第一六回定期大会の直後に、日教組第一五回定期大会で山形県から「戦争教育の記録」が提案され修正可決された。⁷⁴日教組の定期大会速報は次のように報じた。

戦争の反省記録

山形 全組合員が戦前において、時の政治権力に迎合し、追従したために、子どもたちを不幸におとしいれたこと、そのような教育をうけたものとしての怒りや悲しみを「戦争と教育の反省記録」としてまとめあげ、これを教え子を再び戦場に送らない、

われわれの不退転の決意として国民に訴える
—可決—⁷⁵

三、「こんなことがゆるされては」・記録集の発刊

一九五七年九月以降、『山形教育新聞』では勤務評定に関する報道が増え、県教組が勤評闘争を激しく展開していた。こうした時期（一九五七年一〇月）に、「戦争教育の記録」の趣旨を表す「こんなことがゆるされては」という報告書が、米沢地区支部教研で発表された。執筆者は鈴木だったが、鈴木は坂本と二人で話し合いながら書いたと振り返っている。「こんなことがゆるされては」は翌年二月の全国教研でも報告され、またこの文章の一部が、県教組『第一八回定期大会議案』に引用され、「戦争教育の記録」が説明されていった。⁷⁶

なお、「戦争教育の記録」を提案する過程で「ボス工作」をし、さらに定期大会での提案や、「こんなことがゆるされては」の執筆を鈴木が行ったことに関し、鈴木は自身のことを「戦争教育の記録」の「実行部隊」と振り返る。⁷⁷

以下で「こんなことがゆるされては」の内容から、「戦争教育の記録」を行う意図を見ていく。本史料は「I. 私たちの風土」と「II. この事実を」、「I. こんなことがあ

った」、「2. どうても一本足りないもの」、「3. さらに浸蝕を深めるもの」、「4. サークルのつながりにのみ」で構成される（以下「I」、「II」などと表記）。

本史料では、米沢の人々の「古い」態度を指摘し、その「古い」態度が教師にもあることを、様々な事例を元に示す。そしてその態度を改めるために戦争に協力する教育の反省を行い、教師の思想を作り出すことの必要性を説く。以下で具体的に述べる。

「I」では米沢の人々の「古い」態度を、「つながりをもたない他所者を、わずかに生かしておくことさえ、ひがみを感じる」といった言葉で表現し、それを「米沢の風土」とも呼んでいる。その上でこのような態度のために、「生産的にも、生活的にもたくさんの負教」すなわち困難があるとする。そして、あきらめ、うめく者が生じているという。この風土に切り込む教育を「対決」と述べる^⑧。

「I」で述べられている問題は、鈴木や坂本が生活記録や話し合いの中で認識した問題である。すなわち、「古い」態度のために、村が貧困に陥っている事態である。また、これらの「古い」態度に切り込む教育とは、鈴木や坂本の行ってきたような生活記録のことであろう^⑨。

これらの「古い」態度に関して、教師自身も「古い」様子が「II」と「I」で述べられていく。まず、「II」では

学力テスト反対闘争について記されていく。この闘争は一九六一年のいわゆる「学テ」ではなく、一九五七年九月に実施された学力テストに反対するものであった。

経緯は以下のとおりである。学力テストは、教委の指示で組合員である教師がテスト委員となって運営されることになっていった。そしてそのための説明が公民館でされるので、テスト委員となった教師は、公民館に出張せねばならなかった。当初、この学力テストに対し、組合執行部は反対の姿勢を示さなかった。だが、事前に行われた組合の集会で、テスト委員となった教師、つまり一般の組合員が主導となり学力テストへの反対を決めた。そして、テスト委員となった教師が組合執行部を動かして、教委に対して学力テスト反対の意見を伝えた。これに対し教委や校長会が硬直姿勢を示した。教委は公民館に来ないのであれば「出張命令違反である」と述べた。この時になりようやく、組合執行部も闘争姿勢を打ち出した。さらに組合執行部は、反対要求に加え「出張拒否については不問にする」ことも主張し、闘争により反対要求の一部と出張拒否の不問を獲得した。

この闘争で鈴木は次のことを実感した。

「団結の強さと、信じあうことのうれしさ」であった。指令によつてのみ動いてきた私たちが、執行部

の尻を叩き、代議員にハツパをかけ、戦術をみんな
で考えながら、通しぬいたという強さ、私たちの力
というものが、一人一人の要求と思考から生れて組
織されたときのみ、ほんものになるものだ^②。

このように執行部からの指令ではなく、組合員の下から
の動きにより、教師が団結し闘争したことを評価していた。

しかし、問題はその後であった。ある校長が「教委は出
張拒否を不問にするといつても、おれは校長として黙つて
いない」と発言。すぐさま県教組米沢地区支部の書記長が、
文章でその校長を「あわれな弱虫校長」と批判した。これ
に対して、緊急の校長会が開かれ「組合の正常な発展を念
願して来たわれわれ学校長としてまことに心外」という文
章が出された。さらに、ほとんどのテスト委員が校長から
訓戒を受けた。そこで、米沢地区支部執行委員が校長に謝
罪の文章を出すこととなった。組合が謝罪文章を出したの
は「対立を必要以上に深めることは」「次にくる勤評闘争
の条件を一層不利にするものである」と判断したからであ
った^③。

この事件によって「校長は〔中略〕お教委の前で、校長
のメンツに傷をつけた」という「親分的意識でしかものを
考えられない無思想性を暴露し」、「私たちの風土と、おく
れた私たちの意識を〔中略〕さらけだした」と、鈴木は述

べる^④。

「I」にあったように、鈴木は教育を「米沢の風土」と「対
決」するものと考えていた。しかしながら、その教育を担
う教師の中に見えてきたのは、「米沢の風土」と同様に「古
い」態度であった。ここでは校長の権威的な態度を問題視
していた。

このような校長の態度に加え、「I」では問題のある教
師の態度をいくつか挙げていく。まず校長との関係で次の
ような事例を挙げる。学力テスト反対闘争の後、「あるテ
スト委員は校長に『おれは本当はすぐに公民館に行きたか
つたんだが、あゝいう大勢になつたので出るに出不れなかつ
た』』と述べ、他のテスト委員は「おれは実は嫌だつた。
テスト委員のみんながあんなふうではなく、二、三人の尖
鋭分子にひきずられたのだ」と述べた。このことを鈴木は
「米沢衆という特異な、二枚舌的性格」と表現している^⑤。

教育長との関係では次のような事例を問題視する。
一九五六年末から一九五七年四月まで、教育長に対して人
事闘争を行いつつも、教師たちが「毎日なにか手土産もつ
て教育長宅におしやる」ことも指摘する。そして鈴木は、
「人事斗争の裏では、ゆがんだ顔にへつら笑いをつくつて、
教育長宅におしよせ」る「なかまのあることを考えの中に
入れておかなければならないのだ」と述べる^⑥。

また、実際の授業に関しては「死んでもラツパをはなさないキクチコヘイのような骨のある人間つくんなね^⑧」なんて真面目に話^⑨す教師がいることを挙げる。

さらに教員組合に対する態度も問題として挙げられる。

一九五七年八月に米沢市教育委員会と出張所は、女性教師のための研修会を企画し、各校に対し出席する女性教師の数を指示していた。組合の婦人部は「強制割当はおかしい、自由参加にすべき」と交渉し、自由参加に変更させた。この会が「すばらしい盛会」となった後、「出張所は各校に学校毎に参加者人数と、『大変盛会で……途中で雑音が入りましたけれども……』という。多分雑音というのは組合のことだろうが解説をつけて配布した^⑩」。

以上のように鈴木は三つの教師の態度を問題にしていた。一つ目は権威に迎合する「米沢衆という特異な、二枚舌の性格」である。二つ目は戦前の修身教育のように木口小平を語る教師がいることである。これは戦前、戦中教育のような教育をしている教師がいることの例であろう。そして三つ目は、組合をないがしろにするような発言を述べる教師がいることである。

その上で鈴木は「今の私たちの教師生活が、このまゝの意識でござれていくなら、教育の主体性が、教育の大衆化が、さらに教師としての深化と集中が、いとも簡単に反

動政治の渦にまきこまれてしまうのではあるまいかと思わざるを得なくなる」と警鐘を鳴らす^⑪。そしてこのような教師の態度は「戦後十年という歴史の浅さからくるもの^⑫」と結論付けている。

このような態度を克服するために必要なことを「2」で述べていく。

どうしても権威というものがなければ治まらない習性、人間相互のハガネのような連帯意識のなさ、私たちのもっているこの弱さを、私は、「教師の戦争責任」から考えている。「中略」昭和二十年を起点として、本質的に教育の方向と教師の生き方までも変えていくためには、それこそ厳しい「教育の戦争責任」が追及しなければならなかった筈なのに、戦後十年の教師生活の中で、自己独り、ないしは組合運動の流れのうちに、この切りこみを行ってきたのであろうか。終戦を単純に一つの推移現象としてうけとめ、包蔵する古さと、歴史の誤りとフタをかけ、「新しい教師像」を消化不良のまゝふりまわしてきた。「中略」

私たち自身も再び、どこにでも横すべりしていく教師になりつゝあるのであろうか。

真実に新しい教師とは―それを考えるまえに、私た

ちは厳しい戦争責任と、戦前戦時から簡単にスライドしてきた教育の偽瞞をきびしく追及する経験活動を経なければ、教育および教師の良心を確立することはあるまいと思う。

これまで見てきた教師の態度を「権威というものがなければ治まらない習性、人間相互のハガネのような連帯意識のなさ」と表現する。そしてその態度の原因を、「教師（教育）の戦争責任」や「戦前戦時から簡単にスライドしてきた教育の偽瞞」を追及せずに「新しい教師像」や「教師の良心」を築こうとしてきたことに見ていることが分かる。

また、鈴木は「3」で、これまでに指摘した教師の態度が、強くなりつつあることを述べる。そして「組合活動けつこう、サークル活動けつこう、研修、実践さらにけつこう。しかしおれたちには時間と資本がない」という言葉を挙げ、こうした言葉は「教師自身の無抵抗と、孤独と絶望への自己弁護として最も効果的な麻醉作用を果たしている」と指摘。こうした言葉を述べる教師に時間を与えたとしても、娯楽にいそしむであろうとも述べる。そして「とくにこの傾向が都市部に多く見られる」と指摘する。

このように、現状の教師の問題点を指摘した上で、「3」の終わりと「4」で再び克服するために必要なことを述べていく。こうした態度のままでは「容赦なくのどをしめつ

けてくる歴史の逆戻りへの烈しい抵抗意識や、北方性の教育の受けつぎが、全ての教師のムネ深くおちるまでにはそれは長い年月を必要とするかも知れない。しかし学力テスト反対闘争を通して、「サークル的つながり、職場サークル化の大切さを感じ」、「真実の人間像の確立はサークルによつてのみしかかなえられないことを知った」と述べ

る。ここで「1」〜「4」をまとめ、「戦争教育の記録」の意図を見ていこう。

鈴木は「サークル的つながり」と「職場サークル化」に可能性を見出していたことが分かる。

「4」では「歴史の逆戻りへの烈しい抵抗」や生活記録などの「北方性の教育の受けつぎ」のためには、「サークル的つながり」や「職場サークル化」が必要であると言う。これは、学力テスト反対闘争で実感したとある点から、下からの教師の団結のことである。

このように一度はサークル的につながったにも関わらず、「1」では学力テスト反対闘争後、権威に迎合する「二枚舌の性格」により、サークル的つながりが崩れていったことも指摘していた。

サークル的につながれなくなってしまうこうした態度を克服するためにも、「2」で「教師（教育）の戦争責任」と「戦

前戦時から簡単にスライドしてきた教育の偽瞞」を追及する必要があるとしている。これらを追及していないがために、「反動政治」に巻き込まれない「新しい教師像」、すなわち教師の思想が確立していないからだ。なお「3」ではこうした態度が現在強くなっていること、特に「都市部」でこの傾向が強いことを指摘する。この「都市部」とは旧米沢市のことであろう。鈴木は「こんなことがゆるされては」は、旧米沢市の教師たちの態度を改める意図もあり書いた文章であると述べている。

つまり、「反動政治」に巻き込まれず、生活記録を行い「風土」と対決するためにも、戦争に協力する教育の追及を行い、その上に立った教師の思想を確立して、「サークル的つながり」を強めようというのである。この「サークル的つながり」とは、下からの教師の団結のことである。言い換えれば、青年部の提案が親組合からつぶされるような状況を改変しようということであろう。一九五五年五月、「職場討議のために」にあつたように米沢地区支部青年部は、青年教師の態度を改めることで、青年教師が団結し青年部の活動の質を高めようとしていた。「戦争教育の記録」は、生活記録的手法で青年部の質を高めようとした運動の延長線上にあるといえよう。

『山形教育新聞』では一九五七年一二月に入っても紙

面の大半を割いて勤務評定の問題を報じ続けていた。第一五七号と第一五八号では、『山形の教育』に掲載される四編の記録が先取りのに掲載された^⑤。勤評闘争と「戦争教育の記録」が相互に関連しあっている様子が分かる。

そして、一九五八年一月一五日に『山形の教育』が発刊。『山形教育新聞』は「県の学校白書がこのほどようやくまとまり、戦争と教育の反省記録を加えてB五変型版の『山形の教育』という六四頁の冊子となつた」と報じた。そして「戦争と教育の反省記録は「中略」その後和歌山での日教組大会でも可決され『教え子を再び戦場に送り出さぬ』ため全国の教師がかつての戦争教育の体験をペンで綴る仕事にとりかかつたのである」と報じた^⑥。

四、『山形の教育—学校白書と戦争教育の記録—』とその影響

『山形の教育』の第三部「戦争教育の記録」は、総頁数三五頁で記録は全部で四五編ある。構成は、冒頭に「大衆としての一人」という記録がある。その後〈子供の悲しみ〉〈青春はどこへ〉〈天皇教(気も狂わずに)〉〈暗い人間関係〉〈戦後(戦争)責任〉^⑦という計六章に、それぞれ五〜九編の記録が収録され、さらに児童の作文や詩も七編収録され

る。

各章の内容を概観する。〈子供の悲しみ〉には小学生（国民学校生）であった筆者らが受けた理不尽な教育の記録が収録される。例えば、教師からの理不尽な指示を拒否できない様子や、体罰が横行している様子についての記録である。〈青春はどこへ〉には中学生や師範学校生、高等女学校生であった筆者らが経験した、戦時中の様子を描いた記録が収録されている。ここでは、〈子どもの悲しみ〉同様、理不尽な教育に加えて、勤勞奉仕により教育を受けられない点も記録される。〈天皇教〉と〈気も狂わずに〉には、教師であった筆者らが教え子に行った教育を、批判的に記した記録が収録されている。また、〈暗い人間関係〉は視学や校長の権威性についての記録である。〈戦後責任〉には任命制教育委員会や、道徳教育を主張する教師がいることなど、戦後の教育界の保守化についての記録が収録されている。

これらのうち、教師であった筆者が教え子に行った教育を、批判的に記した記録と、〈暗い人間関係〉に収録された記録に注目する。「はじめに」で述べたように、戦争に協力する教育の様子を、その教育を行った教師自身が批判的に記録した「戦争教育の記録」は、『山形の教育』を含めたいくつかの記録集以外には見られない。従って、本運

動の特徴を具体的に示すためにも、このような記録を見ていく。

また、〈暗い人間関係〉の記録は、視学や校長の権威性、職場の人間関係が原因で教師が戦争に協力する教育を行ったとしている。「戦争教育の記録運動」が、教育行政が保守化する中で、教師が権威に迎合し、戦争に協力する教育を行うことを防ぐ目的で進められたという点を考えれば、戦中の教育で権威的であった視学や校長を描いた〈暗い人間関係〉の記録を確認する必要がある。なお、『山形の教育』は全て筆者の名前と勤務校が記載してあるが、本稿では名前の掲載の了承がとれていないため、名前は掲載していない。

まず、教師が教え子に軍人や満蒙開拓青少年義勇軍を志願させ、死に至らしめたことを悔いる記録である。「語ることさえためらわずには」の筆者は教え子に対して、次のような言葉を繰り返していた。「日本男児とうまれて、この聖戦に参加しない人は、一生の恥だ、皆の将来は、洋々たるものがある。第一に志望してほしいのは、陸海軍航空兵、第二に、満蒙開拓義勇軍、それにも征けぬ人は、産業戦士か、農兵隊に志願すべきだ」。この結果、教え子の中には戦死したのもおり、筆者は「国策といい、時の勢いとはいえ、なんと罪深い教師であつたらう」、「『あやまち』

といつてすまされるものではない」、「あまりの罪の深さに私は、教員を退めようと考えたものだ。しかし、この罪のつぐないのためにこそ、生きるべきだとも考えた」と自身の責任を認め、悔いている。

次に、戦中の自身の教育が、戦後の教え子たちに影響を与えたことを記し、自身の責任を指摘する記録である。「T子さんへ」では、ある教え子が無口で困ると、教え子の母親から聞いたことに対して、筆者の考えたことがまとめられている。筆者は、「何かと言えは『黙れ』『文句を言うな』式の教育をやつた私の責任ではないのかしら。「中略」あの時の教師は「無言病」という病気を心の中に刻みつけてしまったのでしようか」と、自身の責任を記している。このような形で、『山形の教育』では戦争に協力する教育の様子を、その教育を行った教師自身が批判的に記録していた。

次に〈暗い人間関係〉に収録されている、視学の権威性についての記録である。「視学さま」は「戦前に於て教師の最も恐れ、且又警戒した者は視学であつた」という言葉で書き出される。そして、視学の来校に際し、校長が「準備に血まなこになり」、教師に対して「教室経営やら、環境の整備」を行えと命じ、「生徒が来客に欠礼のないようにし、授業に於てもよく計画立案して指導に当れ」とも言う。

このような「教師達の好まない、又生徒のためでないこと」でも、行わなければ「視学様の御機嫌を損ね、校長の首が危」いのであつた。そしてこのことが「視学達を益々官僚的にし〔中略〕自ら我が身を拘束する羽目に落し入れ」「今も尚こうしたことが残存してはいないでもない。」と指摘する。

校長の権威性も指摘される。「戦前をかえりみて」で「校長にたいしてすらも絶対的なもので、実に近親感はうすく、事務上の話しあいをするぐらいのもの」と記されるように、筆者にとっては校長も絶対的な存在であつたようだ。そして校長との関係は、校長から「たゞこうしてもらいたいといわれれば『はい』と聞く程度」であつた。

また筆者は、こうした状況下で、戦争に協力する教育を批判的に見ることが出来なかつた原因を、女性教師の地位に見出す。筆者は「『現状を考えてみることに』」批判をするということが「まして『自分達の力で世の中のおごきをかえることができる』ということなど、思つてもみなかつた」と、戦時の自分を振り返る。そして「女教師ということの、学校での地位の低さ、社会的地位のひくさということが」「女の思考力を消滅させ、積極性を阻害させた」と述べ、女性教師の地位の低さが、戦争に協力する教師を生み出したとする。

女性教師を取り巻く人間関係については別の記録でも指摘がある。「戦前の人のつながり」では、「タイトスカートをはいていつたら、早速女の先生の一番号上の先生に呼出され、腰巻のようで余り見て良くないから、ひだのあるものをはいて来いと言われた。私はおかしい気もしたが〔中略〕いやとも言われずはくのを止めた」と、筆者が格好やふるまいを注意され続けた様子を記録する。またそれが嫌で他の教師との接触を断てば、その点も注意される様子が記される。

このような、校長が絶対的で周囲の教師からも監視されるような状況で、校長に従わなかった時の様子を描いた記録が、「みにくい同士討ち」である。筆者は休み時間は子どもたちを体操場に出すという校長の命令を無視し、教室で遊ばせていた。そのことを「校長の通りには」せず「子どもの欲求をみたしてやる」「ささやかな無言の抵抗をした」と振り返る。以下は「ささやかな無言の抵抗」の後の様子である。

ある日、授業中校長に呼びだされた。

「Aさん、遊び時間に教室で遊ばせているじゃないか。」

「……………」

「そういうことをしたけりや、〇〇学園に行くか、

お山の大将になるんだな」〔中略〕

しばらく経つたある日、何かの用で職員室に行つた。同僚たちは大火鉢の脇で一ぷく、あるいは次の時間の準備をしていた。入るとすぐ、また校長は、

「Aさん、子どもたちを体操場に出しているか。……勝手なことしたけりやお山の大将になるか、〇〇学園に行くんだな。アツハハ」と眼鏡をあげてうそぶいた。同僚たちもニヤリと笑い、何か書きものをしていた今は亡きT上席は、「生活教育とかをやっているあの連中がそういうことをしているんだろう。ウフフフ」と笑つた。

一人の味方もいない。しかし、私は求めはしなかった。あの時代のことだから。もしひとことでも同情をしようものなら、その人もただちに同族にされてしまふからである。

私はただ歯をくいしばつた。

校長の指示に従わなかったために、校長や上席から批判を受けている様子が分かる。

さらにこの記録では、筆者が支持する校長が、他の教師が特高に密告したことにより解雇され、密告した教師が出世した様子を記す。

このように、校長が教師に対して権威的であるだけでな

く、その他の教師同士でも非難し合い、おとしめ合う状況にあったことを筆者は記録する。このことを筆者は「人間を教育する同じ道を行く者同志で殺したり生かしたりしていた」と表現し「勤務評定が問題になっている今、昔のことを思うにつけ、いろいろと考えさせられ、芥川龍之介の『くもの糸』を思いおこす。平和な人間を育てる同じ道を行く者同志だけでも（教育行政官もふくめて）しつかりと手を握りしめたい。」と勤務評定によって、教師同士で「殺したり生かしたり」が生じると警鐘を鳴らす。

勤務評定についても言及しているように、勤務評定が実施されれば、こうした人間関係や態度が強くなるということとを危惧しているのであろう。

このように〈暗い人間関係〉では、戦時中の教師の人間関係とそでの態度を描いていた。人間関係として、視学や校長の絶対的な様子が描かれる。そして校長に対し抵抗した場合、校長から非難され、さらに、他の教師から手助けがあるというのではなく、教師同士でおとしめ合う様子も記録される。こうした人間関係の中で女性は最下層に位置し、思考力を奪われていたと述べられる。また、この状況の一部は一九五八年当時も「残存していないでもない」く、また勤務評定の実施で強化されると言う。

そして、このように一九五八年当時の教師とも共通する、

史苑（第七七巻第一号）

教師の人間関係や態度の結果、「語ることをさえためらわずには」や「T子さんへ」の記録のように、教師が戦争に協力する教育を行うこととなったという見方が多くの記録にあった。

この後、『山形の教育』は、勤務評定そのものや、勤務評定を進める教育長への反対の根拠となっていく。まず、〈暗い人間関係〉に収録された記録が『山形教育新聞』の「職場の人間関係」という特集で、勤務評定の効果を説明するために引用される。ここでのテーマは女性教師の地位および職場での発言の自由であった。『山形の教育』の中の、女性教師の地位や職場での発言の自由を問題視する記録を引用しながら、戦中と戦後の相違点、勤務評定の問題点を問うていく。

この特集号は、「戦前の人のつながり」、「戦前をかえりみて」の一部を引用しながら「戦前、押しひしがれ、無気力にさせられた女の先生が、戦後どのように変わってきたのでしょうか」と問いを立てる。そして、女性が校長や上席になっていることを挙げて、状況が改善したことを述べる。一方で、アンケートを用いて、不十分な点も指摘する。「戦前、あれほどしいたげられ、ほとんど抵抗力さえ失つたように思われる女教師が、戦後の民主化の波にのつて、花々しく活躍し出したとはいえ、一旦しみ込んだ男教師依

存の習慣はなかなか抜け切らないもの」「こうしたところに、今まで見てきた女教師の進出が、案外根の浅いものであることと又男の反発が意外に強いことが」分かる、と述べる。女性教師の地位が低かったために、女性教師が無気力にさせられたという点を、「戦前をかえりみて」は指摘していた。そして一九五八年の現在も女性教師の進出は不徹底であると述べる。その上で、「勤務評定などが出たら、こうした傾向がぐんと強くなるだろうということが心配されます」と、勤務評定によって、男性教師に依存する傾向に拍車がかかり、女性教師の地位が戦前のように戻ってしまうと警鐘を鳴らす^⑩。

またこの特集号では、「職場に自由に話し合える気風があるか」も問題にしている。「みにくい同土討ち」を引用し、現在は話し合えているが「勤務評定などというものが出てき、再び縦の人間関係が強められたら、このなごやかさはどうなるでしょうか。」と、勤務評定によって職場の人間関係が戦前のようになるのではとする^⑪。

このように、『山形教育新聞』では、『山形の教育』で記録された具体的な戦時中の人間関係や態度を引用しながら、それらの改善がいまだに不徹底である点を述べ、勤務評定が出れば戦中のような人間関係や態度が強化されると、警鐘を鳴らしていた。

さらに、勤務評定を進める教育長と対決するためにも『山形の教育』は重要な役割を果たしたようだ。一九五八年二月二四日には、「勤評に反対する意思統一と、斗いの構えを確立する目的」で県教組の第一七回（臨時）大会が開かれる。この大会議案の中で、「勤務評定に反対するわけは、勤務評定の眞のねらいが、教育の権力支配をめざすものであるからである。〔中略〕わたしたちは、教育の権力支配ということが、どのような悲惨な結果をまねき、職場の人間関係をゆがめるものであるかということをも、『戦争教育の記録』で明らかにした」と述べられている。『山形の教育』によって、勤務評定の危険性が明らかにしたと述べる^⑫。

また、この大会では、山形県教育長の退陣要求が提案され可決する^⑬。この点に関して、一九五八年六月に発刊された『日教組十年史』は「一九五八年二月の臨時大会において、塚原教育長による戦後十年の教育行政を〔中略〕批判し、〔中略〕刷新を要望し、それに応じなければ退陣要求運動を起こすことを警告しえた一つの条件にはこうした戦争教育の反省を記録する運動が与って力あった」と、述べる。勤務評定を進める教育長の退陣要求の根拠として、『山形の教育』があったと『日教組十年史』は評価する。

このように『山形の教育』は、戦争に協力する教育の様子を、その教育を行った教師自身が批判的に記録した上で、

その要因として視学や校長の権威的な態度や、職場の人間関係があることを指摘し、勤務評定そのものや、勤務評定を進める教育長への反対の根拠となった。

おわりに

鈴木に焦点を当て、山形県内で「戦争教育の記録」が構想される経緯、刊行された『山形の教育』の内容、そして『山形の教育』と教育行政の保守化との関係を見てきた。最後に、生活記録運動の中から「戦争教育の記録運動」が生み出される経緯とその後の展開をまとめておこう。炭焼きを生業とする農村の教師になった鈴木輝男は、教え子たちの嘆きを解決するために生活記録を開始した。当初、鈴木的生活記録は村の「古さ」に苦しめられている教え子たちを、その「古さ」から解放することを目的としていた。しかし、生活記録を進める中で、「古さ」を批判するだけの生活記録に限界を感じるようになった。それは、村の「古さ」をただ批判するだけでは村は変わらず、さらに村から都会に出ていった教え子たちが、都会でも苦しい生活を送っていたからであった。こうして、鈴木的生活記録は、村の「古さ」そのものを変えることを目的とし、これに応じて村の大人も含めた生活記録へと形を変えていった。

またこの時、鈴木は戦中の教師と自分たちの同質性にも気が付いた。戦中、貧しい農民が憧れを持って満蒙開拓青少年義勇軍に参加しそれを教師が支えたように、戦後、貧しい農民が憧れを持って都会へ行き、それを自分たちの生活記録が支えていることに気が付いたのであった。こうして鈴木と坂本が戦争と教育について話し合い、職場の教師に対して聞き取りを開始した。

その後、教育行政の保守化に危機感を持った鈴木は、教師が権威に迎合し、戦争に協力する教育を行わない思想を作るためにも、「戦争教育の記録」を提案した。なお、既に鈴木は都市部の青年教師が権威に迎合する態度を問題視し、これを改変する運動を行っていた。こうした教師の態度を問う運動とも結びつき、「戦争教育の記録」が提案された。こうして作られた『山形の教育』は、戦争に協力する教育の様子を、その教育を行った教師自身が批判的に記録した上で、その要因として戦中の視学や校長などの権威的な態度や、職場の人間関係があることを指摘した。そしてこれらの記録は、教育行政の保守化に反対する根拠となった。

このように、教え子たちのために、村の貧困を問う生活記録を行っていたからこそ、自身の生活記録を省察することができ、教師の有する戦争責任を問う記録を生み出すこ

とができたのであった。

こうして生み出された「戦争教育の記録」は、教師の態度を問う、教師自身の生活記録であると言える。鈴木からの聞き取りや「こんなことがゆるされては」から分かるように、「戦争教育の記録」は次のことを問う意図で提案された。一つは権威に迎合し、連帯することが出来ない一九五〇年代の教師の態度、二つ目は教員組合の質である。これらは一九五五年の「職場討議のために」から継続して問題とされていた。こうした問題を乗り越える思想を作るために、戦争に協力した自身の教育を記録しようというのであった。

実際に書かれた記録は、戦時中の権威的な視学や校長、連帯できない教師を描き、こうした教師の態度の結果、戦争に協力する教育が行われたとしていた。またこれらの記録は、教師の態度を改変しうる勤務評定や教育長に反対する根拠となった。

このように、「戦争教育の記録」は戦争に協力する自身の教育を記録することで、一九五〇年代に直面する教師の態度や組合の質という問題を解決するための取り組みであり、生活記録といえよう。

なお、家永三郎氏は『戦争責任』の中で、「日本国民の戦争責任への積極的な自己批判は全体としていちじるしく

稀薄であった」と述べている。^⑩ このような点から考えれば、「戦争教育の記録運動」は特異な運動であり、生活記録運動の注目すべき側面を示していると言える。

『山形の教育』の後、鈴木、坂本は戦中の職員室の記録を作成しようとした。職員室にこそ、教師の人間関係や「立身出世」への欲が表れると考えていたからであったが、うまくはいかなかったという。^⑪

一九六一年、最上地区支部青年部は、機関誌『ことごとくの声を上げて』の第一号で、「戦争教育の記録」を集めている。『山形の教育』以降、山形県内で発刊された「戦争教育の記録」は、確認した限り『ことごとくの声を上げて』の第一号のみである。この最上地区支部青年部の動きに、鈴木は関わっていないようだ。^⑫

なお本稿は、山形県の地域の運動から「戦争教育の記録」が構想され、『山形の教育』が発刊され、教育行政の保守化と関連を持っていったという点を検討したものであり、「戦争教育の記録運動」研究としては、多くの課題を残している。鈴木、坂本の運動が『山形の教育』を発刊することと終わってしまったことや、他の県の運動との関係は検討できていない。これらの点を含め、「戦争教育の記録運動」の多くの側面が今後明らかにされることを期待する。

註

- (1) 山中恒『ボクラ少年国民』第一部、第五部、辺境社一九七四年（一九八一年）、和田多七郎『ぼくら墨ぬり少年国民』太平洋出版社一九七四年）などが批判している。
- (2) 長浜功『昭和教育史の空白』日本図書センター一九八七年九〇—九一頁。
- (3) 括弧内の時期に各県で記録集が発刊される。
- (4) なお、山形県教員組合の提案と、広島県、岡山県の取り組みの関連性は定かではない。その他の記録集では「戦争教育の記録」という言葉を用いたり、山形県教員組合の取り組みに言及したりしており、関連性が想定できる。また、「戦争教育の記録」と名がついていても、戦中に教師だった者の記録が少ないものや、戦争体験記が多いものもある。
- (5) 北河賢三「生活記録運動の概観」『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店二〇一四年一頁。
- (6) 同前三二頁。
- (7) 同前二四頁。
- (8) 北河「須藤克三と戦後山形の教育文化運動」前掲『戦後史のなかの生活記録運動』。
- (9) 鈴木輝男氏からは三度聞き取りを行なった。以下では二〇一四年一月二五日実施のものを「聞き取り①」、二〇一五年二月二三日実施のものを「聞き取り③」と表記する。
- (10) 聞き取り②。
- (11) 聞き取り①。
- (12) 聞き取り②、鈴木輝男『在野の旗』北方出版二〇〇〇年。

史苑（第七七巻第一号）

- (13) 聞き取り②。
- (14) 同前。
- (15) 聞き取り③。
- (16) 無着成恭の行なった『山びこ学校』を「みんなのもの」にすることを意図し、一九五一年に須藤、無着らが結成したサークル。戦後山形の教育文化運動に大いに影響を与えていく。須藤や山形県内の教育文化運動に関する詳細は、前掲「須藤克三と戦後山形の教育文化運動」『戦後史のなかの生活記録運動』を参照してもらいたい。
- (17) 一九五二年七月に発足し、主に米沢の教師が参加したサークル。一九五三年夏に県児文研の支部サークルとなる。（樋口実「サークル報告 これからの“交流”のサークルをどう考えているのか」『気流』第一九号 山形県児童文化研究会 一九五四年三月）。
- (18) 関中学校三年学級文集「たいまつ」第一一号 一九五三年。
- (19) スズキテルオ「冒険王と少女」『関中学二年生文集「たいまつ」」第四号 一九五二年。
- (20) 鈴木輝男「炭焼き部落の青年学級」須藤克三編『村の青年学級』。新評論社一九五五年二〇三—二〇五頁。
- (21) 鈴木輝男「腕をくむんだぞ——綱木を去るにあたって——」『綱木青年学級生活記録集「溪流」』第四号 一九五五年。
- (22) 聞き取り②。
- (23) 横山敏、牧野修也「山形県の農山村における生活記録運動の出發（一）——山形県旧南置賜群南原綱木学級の事例——」『日本教育社会学会発表要旨集録 六五号』二〇一三年三四四頁。
- (24) 鈴木輝男「まだ腹わたにはしみとおらない」太田堯編

教師の戦争責任を問うた教師たち (松元)

- 『農村のサークル活動』農村文化双書一九五六年二〇七一—二〇八頁。
- (25) 同前二二—二二三頁。
- (26) 同前二二—二二三頁。
- (27) 前掲「炭焼き部落の青年学級」二〇三—二〇五頁。
- (28) 鈴木輝男「お父さんとお母さん ご家庭の皆さんに」『三沢東部中学校二年A組文集 いろいろ端』第四号 一九五八年二月。
- (29) 真壁仁『教科構造と生活認識の思想』明治図書一九六九年七七—七八頁。
- (30) 山林地主は市会議員や村会議員である場合も多い。山林地主は、どこからも肯定されず、肯定されることを求めていたと鈴木は言う。そこで鈴木は、山林地主のおかげで、生徒や青年が学ぶことができるという評価をしてやることで、権力者を生活記録の「支持者」にしたという。(聞き取り③)。
- (31) 聞き取り②。
- (32) 前掲『教科構造と生活認識の思想』一一頁、「まだ腹わたにはしみとおらない」二二三頁。
- (33) 聞き取り③。
- (34) 前掲『教科構造と生活認識の思想』一二頁。
- (35) 聞き取り③。
- (36) 聞き取り②。
- (37) 米沢地区支部青年部総会準備会「職場討議のために」一九五五年。
- (38) 前掲『教科構造と生活認識の思想』一二頁。
- (39) 前掲「職場討議のために」。
- (40) 同前。
- (41) 聞き取り③。
- (42) 『山形教育新聞』大会特集号第二面 一九五四年五月八日。
- (43) 『山形教育新聞』第四三三号第二面 一九五四年八月二〇日。
- (44) 聞き取り②。
- (45) 柳澤みどり『北方の教育運動—その継承と発展—』北方出版二〇一二年 三七六—三七七頁。
- (46) 聞き取り②。
- (47) 聞き取り③。
- (48) 前掲「山形県の農山村における生活記録運動の出発(一) —山形県旧南置賜群南原綱木学級の事例—」三四二頁—三四三頁、坂本源勇「溪流の仲間に手紙をだそう」『ぼうりんぐ』第三号 三沢西部中学校卒業生有志の会 一九五五年六月七頁。
- (49) 聞き取り③。
- (50) 前掲「炭焼き部落の青年学級」一九七—二〇二頁。
- (51) 聞き取り③。
- (52) 聞き取り②。
- (53) 聞き取り②。
- (54) 聞き取り③。
- (55) 同前。
- (56) 聞き取り②。
- (57) 同前、聞き取り③。
- (58) 聞き取り②。
- (59) 同前。
- (60) 『山形新聞』第二五七〇五号八面 一九五六年一月一日。
- (61) 『山形教育新聞』第一二二号二面 一九五六年一月二〇日。

日。

(62) 『山形教育新聞』第一二五号 一面 一九五六年一月三日。

(63) 聞き取り③。

(64) 聞き取り①。

(65) 聞き取り②。

(66) 聞き取り①。

(67) なお、佐々木隆爾は、戦後の教職員組合が結成から勤務評定実施まで、校長が主導していたことが「教員内部の民主化には否定的役割を果たした」と指摘している(佐々木隆爾『勤評闘争』総括の視点から)『教育』五八三号 国土社一九九五年一月六二頁)。

(68) 聞き取り①。

(69) 聞き取り③。

(70) 聞き取り②。

(71) 聞き取り①。

(72) 山形県教員組合編『第十六回(定期)大会議案』山形県教員組合一九五七年七三—七四頁。

(73) 聞き取り②。

(74) 日本教職員組合編『第十五回日教組定期大会速報No.2』日本教職員組合一九五七年二〇頁。

(75) 同前。

(76) 聞き取り②。

(77) 『山形教育新聞』第一五六号 第二面 一九五七年一月二五日。

(78) 山形県教員組合編『第18回定期大会議案』山形県教員組合一九五八年二七—二八頁。

(79) 聞き取り①。

(80) 前掲「こんなことがゆるされては」一頁。

(81) 前掲「こんなことがゆるされては」一頁。

(82) 一九五六年九月に文部省が行なった全国的な抽出式学力テストの二回目である。この学力テストが一九六一年に、抽出式ではなく全国一斉調査となる。(日本教職員組合『日教組20年史』労働旬報社一九六一年八八二頁、「文部広報」一五八号 三面)。

(83) 前掲「こんなことがゆるされては」五頁。

(84) 同前六一一頁。

(85) 同前一頁。

(86) 同前一二頁。

(87) 同前。

(88) 同前二—一三頁。

(89) 同前一三頁。

(90) 同前。

(91) 同前。

(92) 同前一四頁(※なお県教組定期大会議案や『新しい教師集団』に引用されるのは「2. どうしても一本足りないもの」のみである)。

(93) 同前一四—一五頁。

(94) 同前一五頁。

(95) 聞き取り③。

(96) 『山形教育新聞』第一五七号 二面 一九五七年一月二五日、『山形教育新聞』第一五八号 二面 一九五七年一月二五日。

(97) 「学校白書」は、地方財政の統計や学校の設備についての情報、一学級生徒数と学習、健康との関係を掲載。当時、

教師の戦争責任を問うた教師たち（松元）

山形県が地方財政法の適用を受けていたため、学校の様子を明らかにし教育費の削減に歯止めをかける目的でまとめられた。

(98) 『山形教育新聞』第一六二号第一面 一九五八年一月二五日。

(99) 目次では「戦争責任」と表記されるが、実際の頁では「戦後責任」と記されている。

(100) なお、児童の作文は、上記の記録数（四五）には含まれていない。

(101) 「語ることさえためらはずには」加藤慶次編『山形の教育―学校白書と戦争教育の記録―』（以下、脚注でも『山形の教育』と表記）山形県教員組合一九五八年四二頁。

(102) 「T子さんへ」前掲『山形の教育』五六頁。

(103) 「視学さま」前掲『山形の教育』五三頁。

(104) 「戦前をかえりみて」同前『山形の教育』。

(105) 同前。

(106) 「戦前の人のつながり」前掲『山形の教育』五二頁―五三頁。

(107) 「みにくい同土討ち」前掲『山形の教育』五一頁。

(108) 同前五―五二頁（Aさん）の部分には筆者の旧姓が入るが、ここでは「Aさん」とした。

(109) 同前五二頁。

(110) 「みにくい同土討ち」前掲『山形の教育』五一―五二頁。

(111) 『山形教育新聞』第一六四号第一面 一九五八年二月五日。

(112) 同前。

(113) 山形県教員組合編『第十七回（臨時）大会議案』山形県教員組合一九五八年四頁。

(114) 組合史編纂委員会『山形県教組四十年史』山形県教職員組合一九八七年五三六頁。

(115) 日本教職員組合編『日教組十年史』日本教職員組合一九五八年八四三―八四四頁。

(116) 家永三郎『戦争責任』（復刻版）岩波書店二〇〇二年（初出は一九八五年）四二四―四二五頁。

(117) 聞き取り②。

(118) 同前。

（晃華学園中学校高等学校社会科学教諭）

Teachers Question the War Responsibility against Teachers: the Beginning and Development of “The Movement to Record the Education Supporting the Pacific War”

MATSUMOTO, Kenjiro

The aim of this article is to analyze the social function of postwar historical documents called “Records of the education supporting the Pacific War”, which were recorded by the teachers themselves as critical records of their education during the Pacific War.

The movement of recording them was led primarily by young teachers in Yamagata Prefecture. Among them Teruo Suzuki figured in the central. He and his companions asked themselves how they should develop their movement, what kinds of problems were happening in the movement and what type of teachers they should be. These questions to their own movement created and developed “Records of the Education”.

Suzuki became a teacher at a farming village. He started the movement by recording everyday life of their students to solve their problems. At first, his aim of the movement was to release his students from the old-fashioned way of thought of the village. After some time passed, however, his focal point of the movement turned from the release of the students from to the change of such a way of thought itself. The reason of the turn existed in that even if they criticized the way of thinking hard the village still remained to be old-fashioned and those students who went out from the village to cities were still in strained circumstances. That also urged them to change how to record everyday life of the village: not only through the viewpoint of the students but also through that of the adults in the village.

In addition Suzuki found that there were some common points in wartime education and postwar one: Just as wartime teachers rec-

commended humble students to participate in the Youth Troupes for Manchuria-Mongolia Areas, his record also helped humble students to go to city. Such commonality of wartime and postwar educations urged Suzuki and his companions to discuss the relationship between war and education more deeply and to listen to the elder generation of teachers concerned with wartime education. Moreover Suzuki felt worried about the postwar conservatism swing of the national educational administration and tried to lead a movement to change urban young teachers' mind and behavior not to compromise conservative authority.

Against the background of the above-mentioned conditions, Suzuki urged the teachers in Yamagata to record the education supporting the Pacific War, which was at last edited as "Education of Yamagata". As a result these records, which are critical to wartime and postwar education supporting the Pacific War, also gave a critical basis against educational conservatism ideology by pointing out that the education supporting the Pacific War originated from the authoritative behavior of school inspectors and principals and human relations created within their place of work.